

題字：鳩山威一郎

機関紙「友愛」

発行所

(一財)日本友愛協会

〒112-0002
東京都文京区小石川
1-10-13 小石川文ビル2階

TEL:03-5684-3188

FAX:03-5684-3186

E-mail:yuai@yuaiyoukai.com

http://yuaiyoukai.com

発行人：川手正一郎

編集人：

隔月1回 10日発行

年会費

2,000円

第二十五回 平成二十六年文部科学大臣賞

友愛ドイツ歌曲コンクール本選会出演者決定

十二月十二日(金) 文京シビック小ホールで開催

(一財)ドイツ歌曲普及協会と共催

十月三十日(木) 文京シビックホール小ホールにおいて、第二十五回友愛ドイツ歌曲コンクールの二次予選会が開催され、十名の精鋭が本選会に駒を進めた。本選会は、十二月十二日(金)に開催される。多くの方のご来場を期待したいところである。

平成二十六年度の友愛ドイツ歌曲コンクールは、昨年を大きく上回る五十七名(一般五十一・学生六)の応募があり、男性も昨年に上回り十三名となった。

十月二十二日(水)に開催された二次予選では、審査員を悩ませるほどの高得点が続出し、結果二次予選への出場は、例年の数を上回る三十一名(一般二十八・学生三)となった。

このため、午後三時から開催予定の二次予選は三十分繰り上げて開催された。

精鋭十名の競演となる本選会は、十二月十二日(金)まで。当日売りもあります。

本選会出場者のお名前を写真・声域と共にご紹介いたします。氏名の前の数字は本選会の出演順です



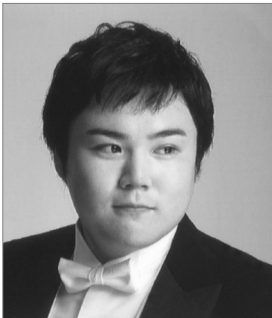
10. 照屋篤紀さん
テノール 一般の部



9. 中嶋俊晴さん
カウンターテナー 一般の部



8. 川口真貴子さん
メゾソプラノ 一般の部



7. 伊藤達人さん
テノール 一般の部



6. 橋田有美さん
ソプラノ 一般の部



5. 杉山由紀さん
メゾソプラノ 一般の部



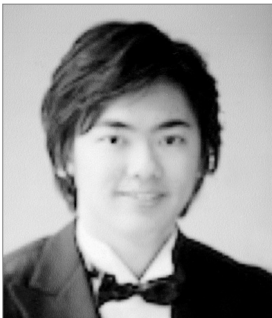
4. 菅谷公博さん
バリトン 一般の部



3. 原千裕さん
ソプラノ 一般の部



2. 福田夕華さん
ソプラノ 学生の部



1. 吉田志門さん
テノール 学生の部

贈呈式開催

ベトナム／ブックラム国際総合病院

枯れ葉剤被害者の

子どもたちに車椅子を

日本友愛協会理事長 鳩山 由紀夫

再びベトナム訪問

九月十三日から十五日までベトナム・ハノイを訪問しました。今回の訪問目的の一つは、ベトナムにおける初めての日本資本によるクリニック、東京インターナショナルクリニックの開院式出席。もう一つは、機関誌『友愛』七月号で報告させていただきましたが、ベトナム戦争時の米軍による枯れ葉剤の影響で今もなおその後遺症に苦しんでいる特に子供達に、無料の整形

治療プログラムを行っているブックラム国際総合病院への車椅子贈呈式に出席のためです。

日本のクリニックの開業は、現地で働いている邦人にとって朗報です。何故なら、私も米国留学時代に同じ思いを経験したのですが、日本人が異国の地でドクターに診てもらった時に、自分の体調や意思を言葉の問題等により正確に伝えることができず、苦勞をすることが多いからです。開院

また、私は昨年、永年の友人であり越日協会会長であるヴー・カイ先生のご紹介により、ハノイ郊外のブックラム国際総合病院を訪れ大変ショックを受けました。それは、ベトナム戦争終結からほぼ四〇年も経つのに、未だに米軍によって撒かれた枯れ葉剤の影響で、四肢や脳、五感などに障がいを持つ子供たちが何万人とおり、さらにそれに含まれる猛毒のダイオキシンにより、遺伝子に異常をきたし三代にわたって苦しんでいるいたり、土地や水が汚染され、体が冒されてしまっている人々もおられることを、同病院のロン院長から伺ったからです。

もちろんベトナム政府も対策は取っており、米国もそれなりの対応は当然ながらしているようですが、それとは別に、何かお手伝いできないかと考え、院内や通院するための車椅子が

二面につづく



贈呈式では、ベトナム共産党のズン中央宣伝局社会部長より感謝状が贈られた。ブックラム病院にとっても日本友愛協会にとっても嬉しいできごとである

友愛時評

▼一〇月末、西アフリカに滞在歴のあるジャーナリストに羽田空港で発熱症状が認められ、日本で初めてのエボラ出血熱患者発生か、と大騒ぎになった。結局、パトカーに先導されて搬送された国立国際医療研究センターで検査結果が陰性として事なきを得た。

▼このニュースに接した日、筆者はちょうど件のジャーナリストが直前に滞在したというブリュッセルに向かう途上であった。そもそも病名の由来となったエボラ川はベルギーの旧植民地コンゴに位置する。アフリカ系の移民も街には多く、空港や駅の雑踏で如何に可能性がありそうな人々との接触を避けるか、など余計な気をもんだ。▼アフリカとの関係が深い日本では、今回のエボラ出血熱は他人事である。新型インフルエンザなど他の感染症に比べると、一般の人々の知識や関心の乏しかったようだ。▼人類の存亡に関わる感染症に対して、島国である日本が「水際作戦」を最重視するのも一理はある。だが、仮に中国で感染が広がった場合に水際で食い止められるのか。米国内の感染対策に関連してオバマ大統領が力説したように、何とか発生源で封じ込めるよう努めなければならない。▼「検疫」(quarantine)の語源はイタリア語の「四〇日間」だが、エボラ出血熱の場合には「二日間」の経過観察が求められている。現地で活動する医療関係者は、その間、家族との接触も避け孤独に恐怖と戦うのだという。それでもなお事態の収束に努力する姿勢には本心に頭の下がる思いである。発熱のないことに安堵する我が身の小ささを恥じつつ、国としても個人としてもできることはないか、考えながらの帰国の途であった。(ヒゲ)



壇上に整列した車椅子。それぞれに日本友愛協会の名前入りのステッカーが貼られている

圧倒的に不足しているといふことから、今回、日本友愛協会と同じく私が理事長を務める東アジア共同体研究所が協力し、加えてアビリティーズ・ケアネット社の全面的な協力のもと、車椅子を五〇台贈呈することになったのです。

感激の車椅子贈呈式

贈呈式ではベトナム流の踊りや歌で熱烈な歓迎を受けるとともに、ベトナム共産党のダオ・ヴァン・ズン中央宣伝局社会問題部長、前国家副主席チュン・ミン・ホア氏から感謝の挨拶があり、最後は障がいを持つ子供達も満面の笑みで車いすに座って記念の写真撮影が行われ、感動の渦が巻き起こりました。私たちの出来ることは小さな事かも知れませんが、少しでも子供達の笑顔が見られれば、これに勝る喜びはありません。また、「ベトナム国民の謝辞」という詩が披露され、日越における民間同士が互いに発展し喜びを分かち合える関係の大切さを強く



日本友愛協会のロゴマーク入りのステッカー。左のYと右のIがW私たちを創り世界を創ると書かれている



贈られた車椅子に早速座って笑顔を見せる子供たち。親御さんも嬉しそうに見守っている



ベトナムのテレビ局からインタビューを受ける鳩山理事長。今回の車椅子寄贈は大きな話題となった

このような「友愛」の交流による日越の絆を継続していく必要性を再認識した訪越になりました。

く認識した次第です。

その後、日曜日にもかかわらず、ゲン・タン・ズン首相との会談が首相府においてセットされました。ズン首相からは、越日の友好関係に対する尽力、そして首相時代に越日関係の発展に努めたことへの感謝の言葉がありました。そして、クリニックの開院と、ブックラム国際総合病院への車椅子贈呈に首相も大変感動され、日越の協力関係をさらに強めることになったとのお話がありました。

私から、車椅子の贈呈とは別に、枯葉剤で汚染された土地からダイオキシンを等を除くことを、ODAを使って日本の技術協力で行えないか、という提案をし、また、日越両国における中国との領土問題について、対話による解決が大事であるということを上げましたが、ズン首相からは、「枯葉剤の影響がある患者が、国内に二〇〇万人いる。ベトナムは元々、農業や水産業の国であり、今

後、日本の技術協力が必要である。是非、今回はベトナムの南部の稲作現場を日本の農業関係者とともに視察してほしい。また、領土問題については、国際法に基づいて解決することを望んでいる」との話があり、今後とも意見交換を重ねていきたいという事で合意しました。

軽井沢友愛山荘

馬頭琴演奏会開催 ―パオを背景に芝生に流れる音色―

鳩山由紀夫理事長に馬頭琴贈呈 ビッグゲストの登場に会場騒然

九月二十二日（月）軽井沢友愛山荘において、馬頭琴のコンサートが開催された。これは、かねてより馬頭琴奏者ウルグンさんより、鳩山由紀夫理事長に馬頭琴を贈呈したいとお申し出をいただき、その贈呈式を兼ねて開催されたもので、当日は近隣の方々を初め多くの方が緑の芝生の上で演奏を楽しむんだ。理事長がお招きしたビッグゲストに、来場者も演奏のウルグンさんも大興奮の一場面もあり、和やかで華やかな贈呈式となった。

モンゴル高原の遊牧民の家バオ（ゲル）の前で、モンゴル特有の楽器「馬頭琴」の演奏会を開催することは、友愛山荘にバオが設置されたときからの理事長の希望であった。その希望が愛優インターナショナル（石川宏子代表）のご協力を得て、実現される日が訪れた。

本年二月、「友愛クラブ」で馬頭琴演奏グループ「響」の演奏会を行い、出席した鳩山理事長が馬頭琴の演奏を試みるなど、友好的な交流が行われた。その際、日

本在住の馬頭琴奏者ウルグンさんから、理事長に馬頭琴をプレゼントしたいとの申し出をいただき、理事長も大いに喜んでこれをお受けすることとなった。以来、機会を作ってバオの前での演奏会・贈呈式開催は懸案となっていたが、ついに実施することが出来た。

当日は、空模様心配されたがせっかくの機会だからということで、ピアノを芝生の庭に運び、俄か仕立ての客席を作り、準備を進めた。

演奏開始時間の三十分前、大きな出来事が起きた。ウルグンさんの伴奏を勤めたのは、ピアノストの井出徳彦さん、第二十四回友愛ドイツ歌曲コンクールで最優秀共演者賞を受賞された方である。この井出さんからご縁が始まり、ウルグンさんとのご縁につながった、結びの神でもある。

ウルグンさんは、自身の作曲した曲、馬が草原を走る様子を表現した曲などを演奏し、聴衆をモンゴルの草原に誘った。また、モンゴル民謡独特の発声法、一人が同時に三種の音色・音階で歌う「ホーミー」を披露し、大きな拍手が沸いた。

鳩山由紀夫理事長に贈呈された馬頭琴は、ウルグンさんが故国に帰り、弾きやすいように調整されたもので、理事長は早速ウルグンさんの指導を受け挑戦。これからもっと練習しますの言葉を実践すべく、大切にうに抱えて、いただいた馬頭琴を持ち帰った。

*馬頭琴について演奏会などお知りになりたい方は、友愛事務局まで気軽に！



ジョセフ・マイケルさん（右）ウルグンさん（中）鳩山理事長（左）の三人が笑顔で撮影に応じて



ウルグンさんの名演奏に来場者は聞き入っていた。鳥の声、風の音も素晴らしい伴奏となった



合宿中の上智大学総合ゼミの学生さんも突然の出来事にビックリ。理事長ご夫妻と記念写真



ウルグンさんから、とっておきの馬頭琴が理事長に贈られた。ウルグンさんの笑顔が、印象的だ





ジョセフ・マイケルさんも馬頭琴演奏に挑戦。さすが音楽家、すぐに綺麗な音色を奏でた



ウルグンさんの伴奏ピアノスト井出徳彦さん（右）二人はぴったりと息のあった演奏を披露した



早速馬頭琴に挑戦。ウルグンさんの説明に一生懸命指を動かし、弦を操る。そして音が！

ミャンマー

指導者育成プロジェクト

3ヶ月の研修を終え無事帰国

研修生の感想・撮影写真ご紹介

国際交流事業

7月4日から9月30日まで、日本友愛協会国際交流事業の一環で来日したウィン・ナインさんとサン・マウンさんのお二人は、約3ヶ月の研修を終え、無事帰国した。前回（第531号・9月号）でご紹介した研修内容に続き、今号では当事者お二人の研修後の感想をご紹介します。併せて二人が写した写真をご紹介します、二人が深く興味を持った内容を感じていただきたい。

この報告書提出以後、次年度からの研修実施に備えて、ウィン・ナイン、サン・マウンの両氏、通訳など多大な協力をいただいたミャットウーさん（駐日ビルマ学生連盟）、実施の糸口を作ってくださった山本一恵さんを交え、改善点、考慮すべき課題などについて話し合いが行われた。

*** 次年度の実施には活かせるよう、その検討内容を付記しました。

なお、掲載している写真はすべてウィン・ナインさんとサン・マウンさんのお二人が撮影したもので、キャプションはその写真を基に話をされた内容を要約して付してあります。

3か月の研修を終えて

Win Naing（ウィン・ナイン）さん感想

その1）この3か月間、みなさんがプログラムを遂行するため、努力してくださったと感じている。研修では、稲刈りや野菜の収穫などを実際に体験した。加工工場を見学したり、さまざまな農業機械を目にすることもできた。農協を通さず、自分たちで生産から販売まで手掛けている農家の方とも会い、どのような形で行っているのか聞くこともできた。農業に関するさまざまな研究をしている方や事業の担当者から、研究内容や仕事についての説明を受け、意見交換する機会も数多く持った。言葉では表すことができないほど、貴重な経験をした。そして、とても励まされ、自分たちも頑張ろうという気になった。

研修以外では、鎌倉、皇居などの観光地、新宿区内にある小学校の授業や設備を見学する機会があったことも良かった。道路がきれいに整備されていることや、地下鉄の時間の正確さには驚いた。道に迷ったとき、わざわざ目的地まで一緒についてきてくれた人もいて、日本人の親切さも感じた。すべてにおいて、日本は制度が整っていると感じた。

滞在中、多くのビデオや写真をとったので、帰国したら、現地でそれを見せ、自分たちでできそうなことは試してみようと思う。例えば、農業では、狭い土地を無駄にすることなく、作物を栽培する方法や、牛糞を使った有機肥料を自分たちで作ることなどだ。

また、経営者自ら従業員と同じように働くこと、働く時間と休憩する時間をきちんと区別して、無駄な時間を使わないことなども現地で伝えたいと考えている。環境保護の方法もとても参考になった。その点は、NLDの環境保護部門にきちんと報告するつもりだ。

最後に、このプロジェクトを今後も続けていただければ、要望したいことがいくつかある。

米でも、野菜でも、苗を植えたり種をまいたりするところから収穫まで、すべての過程が、自分自身の目でわかよるような研修にしてほしい。野菜についてなら、さまざまな野菜を栽培している十勝のホープランド、米なら新潟で研修できればいいのではないか、と思った。

*** 種蒔きから収穫までの研修は、米の場合六ヶ月以上を要し、短期間のビザでは実現が難しい状況にある。野菜などの場合は、種蒔きから収穫

までの体験が可能と考えられるので、その実施の可能性を探り、実施していく。

.....

その2）今回は、農業機械の仕組みを学んだが、できれば、修理の仕方

も学ぶことができればいいと思った。なぜなら、ミャンマーでは、日本から機械を買ったとしても、修理する方法がわからないから、壊れてしまうとそれ以上使うことができないからだ。

研修が始まる前に、事前にどのような研修をするのか、計画についてきちんと知らせるようにもしてほしい。そして、農業について、本当に学びたいという気持ちがある人を、時間をかけて選んでほしい。その上で、研修生が事前に日本語を学べるようにも準備させてほしい。

*** 言葉の問題は重要で、日常会話から農業の専門的な語句までと幅も広い。今回の研修に当たって、ウィン・ナインさんとサン・マウンさんはミャンマーで短期間の日本語研修を受けての来日であった。その甲斐もあり挨拶、自己紹介などは日本語で行うことが出来たため、初対面の硬さを和らげる効果は大きかった。しかし、短期間の日本語研修では、その程度が限度だと思われ、日常会話を日本語で行うまでに至るにはかなりの期間を要する。

そこで、日本側の協力者にも意見をお伺いしたところ、英語で説明できる人材を確保することは可能性が高いため、むしろ英語を良く解する研修生の派遣が望ましいのではないかとということになった。

短期間で日本語を駆使することは難しく、むしろ英語に堪能な人材を派遣してほしいとの要望を出す方が、双方にとって効率がよいのではないだろうか。これは今後のNLDの課題としても考えていただきたい要素である。

San Maug(サン・マウン)さん感想

その1）栃木では、農家が集まって国から土地を借りて稲をつくっていた。そういうやり方は、非常に勉強になった。

しかし研修というより、労働しているという場所があった。米や果物を使った加工工場などを見学したけれど、それよりも、専門家や農家との意見交換及び今のミャンマーの農業に直接、役に立つことを学ぶ機会が多くあればいいと感じた。

*** 「研修というより労働だった箇所もある」と思われたことは、双方の理解の違いもあった為と思われる。しかしながら、労働と感じる状況を提供することは、原則的に望ましいものではないので、次回以降受け入れ側の状況をしっかり把握する必要があるとの認識に立った。

.....

その2）そういう意味では、新潟での研修は非常に役に立ったと思う。説明を受けたり、質問するには、日本語を理解していたほうがいいと感じた。今後、研修する人は、事前に日本語を学習してきたほうがいいと思う。学んだことを実践するために、現地でも、サポートしてくれるような方法があるといいと思った。

*** いずれの項目においても、本事業は今年度が初めての実施であり、次年度からの継続実施に備え総花的な研修内容となった。その点からは、要望が絞られた感があり今回の研修実施は有効であったといえる。

また、今回のプロジェクト実施に当たり、多くの方々、団体のご協力を得たことをご報告したい。ご協力いただいた方々に、厚く御礼申し上げます。



写真四面につづく

初めての体験、子牛に乳を与えた。酪農用、食肉用の牧場的飼育はミャンマーでは行われていないとか



きれいに包装され並べられた野菜。一つ一つが丁寧だと感想を。野菜は価格が高いと感じたそうだ



水まき、肥料散布などに使われるリモコンヘリ。この様な機器まで導入しているのかと驚いていた



ビニールハウス（簡易温室）の作り方。これを取り入れてきれいで商品価値の高い野菜を作りたいと



見事に揃った稲穂に感激。作付けの効率もさることながら「同じ高さに育っている」と驚いていた



野菜の苗を作っているビニールハウスの内部。苗を作り植えるという作業に驚き、感じていた

友愛 ほんだな

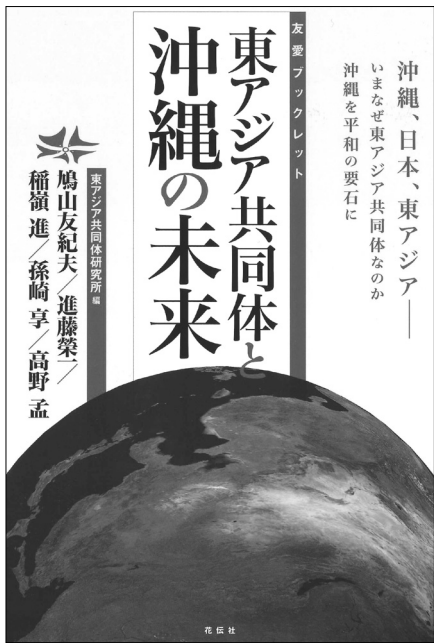
友愛ブックレット 東アジア協同体と沖縄の未来

「協調」であることを私たちに示している。その最大の教訓に忠実であるのかどうか疑問を持たざるを得ない日本の現状を、首相経験者として深く憂慮している。

私は二十六年間の議員生活を引退したことを契機に、二〇一三年三月に東アジア共同体研究所（EACI）を設立し、首相在任中に提唱しながら果たすことが出来なかった「東アジア共同体」の実現と、それを通じて「友愛の精神」に基づく世界平和の達成に残りの人生を捧げることを決意した。

今月の友愛ほんななは、書評ではなく、ご紹介に徹しました。鳩山由紀夫理事長が設立された「東アジア共同体研究所」が発行したブックレット『東アジア協同体と沖縄の未来』です。各著者毎に章立てになっているので、そのタイトル・著者・著者略歴を掲載いたしました。また、前文から、鳩山由紀夫理事長の言葉を抜粋して掲載しております。

「友愛ブックレット」発行にあたって
歴史は、人類発展のキーワードは「戦争」ではなく



沖縄、日本、東アジア—
いまなぜ東アジア共同体なのか
沖縄を平和の要石に

東アジア共同体研究所
鳩山友紀夫／進藤榮一
稲嶺進／孫崎亨／高野孟

東アジア共同体と 沖縄の未来

論をそのままにしておくのはもったいないという思いから、テーマ毎にブックレットという形でまとめることにした。放送時の内容をベースにしているが、登場された方々の協力を得て適宜編集を加えている。インターネット放送と書籍と両方でお楽しみ頂ければ幸いです。（後略）

生まれ。一九七一年琉球大学法学部卒業後、沖縄県名護市役所入庁。二〇一〇年一月の名護市長選挙に「普天間飛行場県内移設反対」を公約に掲げて出馬し、初当選。二〇一四年の同市長選挙でも再選し、現在二期目。

安倍政権下で何が起きているのか

高野 孟
（たかの・はじめ）

一九四四年東京生まれ。一九六八年早稲田大学文学部西洋哲学科卒業後、通信社、広告会社に勤務。一九七五年からフリージャーナリストになると同時に情報誌『インサイダー』の創刊に参加、一九八〇年に（株）インサイダーを設立し、代表兼編集長に。二〇〇二年に早稲田大学客員教授に就任、「大隈塾」を担当。二〇〇七年にサイバー大学客員教授も兼任。

（まごさき・うける）
一九四三年満州国鞍山生まれ。一九六六年東京大学法学部中退、外務省入省。英国、ソ連、米国、イラク、カナダ勤務を経て、駐ウズベキスタン大使、国際情報局長、駐イラン大使を歴任。『戦後史の正体』（創元社）が話題になり二十万部超のベストセラーに。

進藤 榮一
（しんどう・えいいち）

一九三九年北海道帯広市生まれ。京都市立大学法学部卒業。京大大学院法学研究科修士課程、同博士課程修了。法学博士。専門はアメリカ外交、国際公共政策。筑波大学名誉教授、国際アジア共同体学会会長、東アジア共同体評議会副議長、国連ZCODEVNET東京・理事。訪米で見えてきた普天間移設の課題

稲嶺 進
（いなみね・すすむ）
一九四五年沖縄県名護市

トピック：ホトトギス

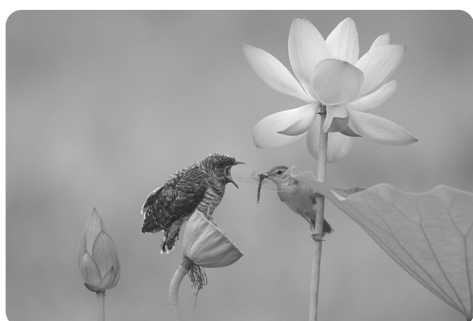
左の写真をご覧ください。少し小さいので見にくいかもしれませんが、雛鳥（左）に餌（トンボ）をやる親鳥（右）の図です。

雛鳥は親鳥よりはるかに大きく、実はこれホトトギスの雛。餌をやっているのはウグイスです。

ホトトギスは習性として自分の巣は持たず、他の鳥の巣に卵を産み、孵化も育てるのも他の鳥に任せます。時には大きくなったホトトギスの雛が、本来の巣の持ち主（ウグイスなど）の雛を押しやり、巣の外に追い出すまでに至ります。それでもウグイスは、巣立ちまで育てます。

この写真は、「友愛国際写真コンクール」で受賞候補に挙がった作品です。中国側審査員と日本側審査員では、作品の鑑賞点がずいぶん違うのです。

自分の子を人任せにする狭いホトトギスが問題だという意見と、他人の子でありながら育てるウグイスの



編集後記

◆古い友人から魯山人の「坐邊師友」と刻字を戴きました。

吉川英治は「人生我以外すべて師なり」という言葉を残しましたが、魯山人は書・篆刻から日本料理を究め、やがて料理は器で引き立つと食器から陶芸、漆芸へと進み、それぞれの頂点に達した粹人であり芸術家でした。

この刻字は、古いものにもその時代の思いがあり、五感に訴えるすべてのものはわが師であり友、という蘊蓄のある言葉で、まさに「目から鱗」。常に初心に返る銘とし、毎日刻字と対しております。

◆十月半ば、かなり遅い夏休みを戴き、何故かパリに行ってきた。気分知れた仲間同志といった雰囲気の旅で、秋のパリを堪能しました。同行のYさんに引かれてモンサンミッシェル参りと相成り、世界遺産を訪問。金比羅さんよりきつい階段に歳を感じ「歩く」を決意。そんな教会の礼拝堂には、祈りを捧げる多くの方が。現在も本堂に聖地なのだと実感しました。かつては遺書を書いて詣でたということを後に知り、頷くことしきり。私はといえば、門前の店の有名なオムレツに舌鼓を打ち、充分満足。馬には乗って見よ、人には添うて見よを実感しました。Yさんに感謝、感謝。そして連れて行ってくださったIさんに、心よりの御礼を申し上げます。（も）

時事川柳

服部迪夫 作

「時事川柳研究会」会長

—攻めに弱い
—決勝戦
—山は生き物
—御嶽山見方をかえる人が増え

—天皇家から
—出雲から届く結婚宅急便
—ノーとイエス
—英国の長い一日終わり告げ
—快進撃
—逸ノ城遊牧民の星となる
—6連戦KO
—具志堅の記録クローズアップされ